

## 2012年夏・「復興」をテーマに写真展



多くの人々が訪れ、戦後復興の歴史に見入っていた  
＝国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館にて＝

「私たちは放射線の怖さも知らず、その日を生きることに懸命だった。情報網のない当時、全国の人々が被爆地の惨状を理解していたとも思えない。それでも現在、復興した長崎の街に私がいる。」と深堀部会長は語っています。

戦争や自然の脅威の前に、最後に信じられるのは「人間の強さ」かもしれません。

## 写真展を終えて

「アッ、ここが我が家だ。親せきの家だ。」被爆直前に撮影された航空写真を見て小さな歓声が上がる。

そして次に、ひと月後の航空写真とを見比べ、八月九日を境に家々がなくなり、街が消えていることに茫然と立ちすくみ声を失う。

原爆写真展会場でよく見られる風景である。

昨年の写真展では福島原発事故後の一日も早い復興を願って先進地長崎から原爆復興の歩みを表現した。

**軌跡** せき

原爆からの復興・NAGASAKI

2012. 8. 1 (Wed) ~ 9. 2. (Sun)

国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館

地下2階 交流ラウンジ

【8月1日～31日】8:30～18:30  
【9月1日・2日】8:30～17:30

長崎原爆写真展

主催：公益財団法人長崎平和推進協会、写真資料調査部会  
共催：国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館、長崎市野七郎八号  
お問い合わせ先：〒850-0844 長崎市野七郎八号  
電話：095-844-9123

被爆から六十七年目の今夏も、昨年に引き続き「軌跡」と題して復興の変遷を中心に、八月一日から九日まで国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館・交流ラウンジに於いて新たに入手した写真を加え写真展を開催した。

会場には一般市民に交って言葉が異なる外国人の姿も見受けられ、中には首を傾げて写真を見つめる光景もあった。展示写真の説明が日本語標記のため理解しにくい点があったのだろう。グローバルの時代不親切といわ

れかねない。英語標記の必然性を痛感した。

今回の写真展は当初、八月一日から九日までと公示。それが、九月二日（日）まで延期することになった。何でも観光客、帰省、夏休みを利用した子供づれの参観者が原爆資料館から追悼平和祈念館に流れてきて写真見学をされる方が多く、急遽延期するに至った。一人でも多く観ていただきたいと願う部会員にとつては喜ばしい状況ではあったが最初の公約を破ったことは詫びなければならぬ。

今年は特に、七月から数少ない部会員（七人のうち二人病気療養中）で郊外の中学や市内の高校で写真展をこなし、例年になく猛暑を乗り越えてくれた部会員の皆さまには心から感謝。また戦後の復興写真を提供してくれた市民や遺族の方に厚くお礼を申し上げたい。



# 被爆写真が伝えるもの

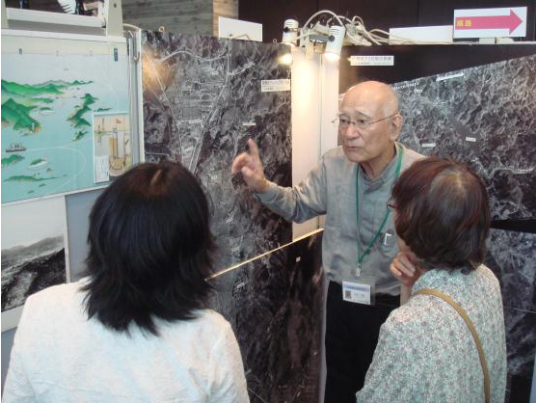
丁度この時期、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館に於いても八月九日アイスランド

で原爆展を主催。智多館長と被爆者（語り部）早崎猪之助氏が出席「平和のメッセージ」を伝えていた。

国内だけでなく海外に目を向けてナガサキ原爆を発信する活動の課題は多い。

今回の写真展会場では、いろいろな人との出会いが沢山あった。笑いあり、涙あり、原爆写真展特有の雰囲気だ。私は人間大好き。一期一会の出会いを大切に今後とも微力を捧げたいと思っている。

（部会長 深堀好敏）



復興をテーマとして展示写真が六十枚、原爆被害から復興への歩みとして年表も展示しました。

米軍撮影の被爆二日前と一ヶ月後の拡大写真は堀田氏の努力により大浦方面まで繋ぎ合わせました。

復興の写真は、米軍兵隊の上陸・浦上駅仮設駅舎・長崎駅前の電車停留所風景・バラック建物群・宝町公園付近の道路工事、昭和二十一年の「くんち」・復興祭の仮装行列、浦上天主堂遺壁の解体工事・爆心地の原爆資料館、岩川町の市営住宅群などです。

来館された方々から「ここで働いていた」「家族はここで亡くなった」「ここに住んでいた」など当時の話をお聞きしました。また県外からの来館者には長崎観光絵図（昭和九年作成）によって上海航路や雲仙・出島・諏訪神社などを知ってもらい、稲佐山方面から撮影した被爆後の

写真（小川虎彦氏撮影）と、現在の写真（丸田和男撮影）を合わせて展示したことで位置関係が判りやすかったです。



浦上駅のバラック仮設駅舎



山里町から大学病院へ向けての道路工事

ただ、説明文に英語表示がなく海外の来館者にはご迷惑をおかけしました。

写真から復興の軌跡が感じ取れたのかわかりませんが当時の状況を知る人々は、言葉少なく唯見入っていたり、夫婦で懐かしがったり、様々な光景が見られました。

一組の夫婦が稲佐橋付近を一所懸命見ていました。

「私は満州にいて帰国したら自宅は何もなかったんです。妻の家も焼けてありませんでした：家族は島原に疎開して無事でしたが、自宅は建物疎開で壊されていたとわかりました。」と話してくださいました。



銭座町の道路工事。後ろに岩屋山が見える



一人の女学生が三菱兵器大橋工場を見つめていました。声をかけると、「住吉トンネル工場はどこですか？」と聞かれ「近くの照田寺付近から救援列車が出て、被爆者達は被害の無い施設に運ばれました。」と当時の状況を説明しました。すると、「曾祖父は大橋工場で被爆して住吉トンネルに逃げて救援列車で川棚病院に行った。と母から聞いて見に来ました。住吉トンネルと川棚病院をこれから見に行きます。」と言っていました。一枚の写真が見る人に与える情報は沢山あり、感じる事はそれぞれですが、それを話すことで伝承され、生き返ると思います。

（峰下正道）

# 今年の県外原爆展 栃木県小山市で開催



小山市が平和宣言を行ったのは平成四年です。

## 平和都市宣言

「私たち小山市民は、恵まれた風土と豊かな伝統のもとに『未来に向かって躍進する希望あふれるまち』小山市を指している。この将来都市像の実現は、日本の安全と世界の恒久平和なくしては望み得ないものである。：私たち小山市民は、生命の尊厳を深く認識し、将来にわたって、わが国の非核三原則が堅持されるときに、平和を脅かす核兵器の廃絶と、世界の恒久核兵器の廃絶と、世界の恒久平和の達成のため努力することを決意し、ここに平和都市を宣言する。」

会場に展示されている被爆資料は十一時〇二分を指した

平和都市宣言二〇周年を記念して開催された「小山市二柱時計、熱線で溶けたガラス〇一二平和展」の会場は、市瓶、焼けた被服等、それに長民の足の便がいいJR小山駅に隣接した市立生涯学習センター写真等です。会場には夏休み―でした。

の最中だけにお母さんと子どもたちの姿が数多く見られました。

お母さんの話によります

と、学校で原爆展のチラシが配布され、子どもたちから「お母さん、原爆展に行こうよ」と手を引かれて訪れたということでした。お母さんの一人は、『親子で戦争のこと、平和のことを話しあいたいと思いました。展示のパネルを見て子どもと話したんです。世界にはまだ何万発もの原爆があるんだって：と。』

別のお母さんは、『私は広島、長崎には行きましたが、子どもたちは行ったことがあります。近くで原爆展が開催されたので子どもと一緒に訪れました。原爆や戦争は忘れてはなりません。子どもたちが大きくなった時、このような悲惨なことを経験させたくないからです。』

今回の県外原爆展は、初めて長崎市と小山市が共催で開催されましたが、小山市では毎年、市内全中学校十一校から代表として選ばれた、二年生の男女を二泊三日で広島へ原爆の日に派遣しています。帰ってきた中学生たちは平和活動のリーダーとして活動するということです。

昨年の派遣団の感想が一冊のパンフレットにまとめられています。その中の一人・小山中学校の渡邊美和子さんは、

「平和祈念式典では、暑い中、約六万人の人が参列したそうです。大勢の人が注目するこの式典に、平和な未来を願う者として参加できた事に喜びを感じました。しかし、その喜びもすぐ恐怖に変わりました。そう、広島に原爆が投下されたあの時、空はこの上なく晴天でした。そして、この日も同じく雲一つない晴天で

は投下され、大切な人も物も、

すべてを奪っていった…。私はその恐怖に震えました。平和の鐘がなった時私は誓いました。私は紛れもない事実を知った者として、原爆投下という悲惨な行為を繰り返さぬよう、伝えなくてはいけない。放鳩された鳩が大空へ自由に飛んで行く姿をみて、世界の苦しんでいるすべての人に幸福を運んでほしいと願い、今、自分が貴重な体験が出来ている事に、ただ、ただ感動していました。」



114面につづく



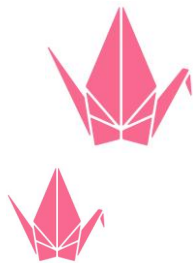
また同じ中学校の齋藤俊樹君も、

「三日間で学んだことをみんなに伝えなくてはいけない、という責任感と使命感が芽生えました。小山中学校のみんなは、友達の話をよく聞いてくれる人ばかりなので、しっかりと自分が学んだことを伝えれば、みんなも原爆の恐ろしさを、戦争の無意味さ、日本が過去に犯した罪のおろかさなどを分かってくれると思います。そして、みんなが戦争や原爆反対の輪を広めることができればと思います。『被爆者の意志を受け継いだ僕たち広島派遣団がやらなければ、未来は変わらない。』僕はそう思います。原爆はいらない。それと同じで原発もいらないと思います。いくらエネルギー利用とは言え、核は核。人と核が共存していくのは無理だと感じました。僕たちが大人になった一〇年後、二〇年後には、核が存在しない平和な世界にしたいです。」



小山市での「二〇二二平和展」開会式には大久保寿夫・小山市長も出席し、テープカットを行いました。参加した市民の中に制服姿で参加していた今年度の広島派遣団二十八人の市内中学校の生徒たちの姿が際立っていました。

(堀田武弘)



## 震災後の変化

通年、原爆写真展では被爆の実相、被害状況を中心に写真の選択をしています。核兵器の非人道性を伝え、二度と使用してはいけないと訴える為です。来場者の方にその意志は伝わるものの、年々過去の出来事として捉えられ、現実感が希薄になっていくような気がしてなりませんでした。状況に変化がみられたのは、昨年の東日本大震災以降です。原爆写真の中に震災被害の風景を重ね合わせ、共通の痛みを感じとる方が増えています。その方々の疑問の一つが「長崎はどのように復興したのか」というものでした。



焼け跡の残る町に東古川町の川船が…  
(昭和21年10月 小笠原正巳撮影)



宝町付近の道路新設工事  
(昭和25年12月 提供写真)

「復興」に関する写真は、原爆被害とは直接の関連はないので、従来当部会の収集の対象にはなっていません。今回は復興に携わった個人の方から提供されたアルバムより、珍しい写真を選ぶことができました。

終戦一年後のおくんち風景からは、長崎っ子の気迫を感じ、銭座町から宝町付近を流れていた御船川、今は埋められその存在さえ忘れられています。写真で見ると想像していたより大きなものがありました。総ての復興写真を見ると、当時の人々の息遣いまでが聞こえてくるようです。

展示写真で一番心魅かれたのは、戦災孤児たちの写真です。聖母の騎士園が昭和二十二年より孤児の收容を開始し、施設を旧三菱造船所小ヶ倉寮(現・新戸町)に移した際に撮影されたものです。信頼と安心感に満ち溢れた笑顔でした。このまま平穏な日々が続くことを願わずにはいられませんでしたが、説明には昭和二十四年一月の火災により施設收容者一五二名のうち七名が焼死するという痛ましい事故が発生したとありました。やはり現実には想像以上に厳しかったようです。より忘れられない一枚です。(調 仁美)



上戸町の戦災孤児收容施設の児童たち  
(聖母の騎士園:提供)